

# ラングーンにおける華僑社会構造

—— 福建幫と広東幫について ——

内 田 直 作

## 一 序 説

国外における中国人、もしくは「華僑」は、国府僑務委員会刊行の「華僑経済年鑑」(民国五十五年)一九六六年<sup>①</sup>版)発表の「世界各国における華僑人口分布一覧表」によれば、その総計人口数は、一、七七〇万八、六九五入であつて、その九六・七％は、日本以下インドにいたるまでのアジア州に集中し、さらに東南アジア諸国(フィリピン・ラオス・ベトナム・カムボジア・タイ・ビルマ・マレーシア・シンガポール・ブルネイ・インドネシア・チモール)におけるそれは一、三四四万九、六二七人であつて、七五・九％を占め、モンソン地帯の主としてモンゴロイド系人種の住む東南アジア諸国に集中している。そのうち、ビルマは四二〇、〇〇〇人と推計され、タイ・マレーシア・インドネシア・シンガポールについて第5位を占めている。ビルマ総人口数二、一〇〇万人の二％を占めるにすぎない。

ラングーンにおける華僑社会構造

ラングーンにおける華僑社会構造

東南アジア諸国の華僑社会のうち、「シンガポール共和国」の場合のごときは、総人口数二、一四七、四〇〇人に対し、華僑人口比は七六・一％の高率を占め、独立以来、一五年間終始人民行動党の李光耀内閣で終始し、閣僚一三名中非華人は三人にすぎない。また、一人当り国民所得は、一、三〇七・九米ドル（二・二五シンガポールドル相場で換算、一九七二年度）で、東南アジア諸国中最高の経済成長を示している。<sup>(2)</sup>

これに反して、ビルマの場合は、政治家年鑑＝The Statesman's Year-book（但し、今年版、一九七三―四年度は除く）にも全然記録がなく、またエカフェ統計年鑑（日本エカフェ協会出版）をみてもビルマの項目はあっても、GNP、一人当り国民所得等に関するインディケータ―は一九六五年以降はブランクとなっている。ただ華僑経済年鑑（一九六七年版）にはビルマ人の一人当り国民所得は五七米ドルと推計されている。<sup>(3)</sup>

一九六二年三月のクーデターで、ネ・ウイン＝General Ne Win (Shu Maung) 政権の成立をみってから、強硬な農業重点の社会主義体制と排外主義が実施されるとともに、二大輸出品目の米とチーク材の国家独占、翌年には全外国銀行一四行、民間銀行一〇行の国有化、貿易・卸売業・農産品集荷加工・金融・工業は国家管理に移され、土地の国有化、企業国有化、反対党のAFPFL党＝Anti-Fascist People's Freedom League の打倒、労働・農民・企業家・文化・教育・宗教等一切団体の登録強制等、新経済政策を強硬に推進した。

ビルマは総面積六〇五、〇〇〇平方キロで、北部の山岳地帯は中国の雲南省に接して、カチン州＝Kachin State とシヤン州＝Shan State があり、人種的にみるとモン族＝Mons, カレン族＝Karens, チン族＝Chins, アラカニーズ＝Arakanese 等の少数諸民族が介在し、ビルマ族＝Burmese は総人口数のほぼ六割前後を占めて、中部のマンダレー＝Mandalay からイラワジ＝Irrawaddy River のデルタ地帯の中心地域に集中して、

る。それ自体複合社会＝Plural society もしくは多人種社会＝Multi-racial society を形成するのみならず、現在でも筆者が昨夏ラングーンを訪れたときにも、その強硬な排外主義にもかかわらず、約八万を算する華僑が西南のラングーン河から北部の光金塔＝Shwadaagon Pagoda との間で唐人街を形成し、他方全ビルマでの華僑全人口数は約四五万と推計されていた。<sup>(4)</sup>

そのほか、インド人人口数もほぼ同様、六万人がラングーンの東部方面に集中をみている。

ネ・ウィン軍政下において、華僑資本は壊滅をみて、自営の途はなく、他の「人民商店」からの配給品、日常生活品、政府の許可のもとに三〇余種の土産を取扱って生活するか、ビルマ人の会社・商店・機関の労働者としての地位に墮していた。

華僑の「商業」のうち残存しえたものは、一九六七年度で「酒樓茶室」三二六、「茶室」四二、「服装」四二、「皮靴」四三、「理髮」二六、「洗染」一九、「水菓」一〇、「醬園」一一、「鶏鴨」一四、「鉄工」一〇、「精菓餅乾」三七、「自動車修理」一三、「ビスケット」二三、「製帽」一六、「糖菓」六五にすぎなかった。

その他の「土産」、「洋雜貨店」、「缶頭食品」、「布匹」、「米業」、「中西藥」、「土木」、「コーヒ」、「紅茶」、「中国茶業」、「磁器」、「新聞社」、「文具」、「印刷」、「家具」、「自動車材料」、「首飾」、「電器」、「木炭」、「映画劇場」、「広告社」、「洋紙」、「皮革」、「海産物」、「玩具」、「酒場」、「貿易」、「洋酒」等の諸企業は全部閉鎖せしめられた。

「工業」に関しては、「ビスケット」二三、「製帽」一六、「糖果」六五工場のほかは全滅で、「煙草」、「精米廠」、「製油廠」、「木材」、「ゴム加工」、「帆布」、「線衫」、「布廠」、「鉄釘」、「粉糸」、「米粉」、「棉毯」、「米糖」、

### ラングーンにおける華僑社会構造

「拉鍊」、「塑膠紙」、「豆餅」、「麵乾」、「襪衣」、「プラスチック」、「ナイロン」、「鑄造」、「麵條」、「缶詰食品」、「茶品」、「紙版」、「化粧品」、「鋸鍋」、「糖廠」、「雨傘」、「乾電池」、「磚瓦」、「麵粉廠」、「サイダー」、「破璃廠」、「洋燭」、「マツチ」、「小型機器」、「磁器」、「陶器」等の諸工場は華僑資本経営を認められなくなった。そのほか開礦・伐木・煮塩・捕魚・釀酒・煮糖・ゴム栽培・玉石採取・寶石・製繩・漁網・沙籠織・旅社等についても、華僑の経営従事がすべて否定されることになった。例外は菜園・果樹園・牛羊牧畜・豚養・花栽培・豚肉販売・野菜販売については、若干の地区では認められ、また逆に認められない場合もあつて、ビルマ籍のもののみ経営が認められている場合もある。<sup>(5)</sup>

右のごとく、華僑資本は欧米資本、インド人資本とも同様徹底的な弾圧下におかれ、出国するものも少くなつたが、依然として小販・労働者としてスラム化した環境の中で、残留するものもみられ、伝統主義的、旧套的な華僑社会構造を保守温存し、その困苦耐忍の強韌性をまのあたりにみせられた。

ラングーン在留の華僑は、福建幫と広東幫の二大勢力に分かれ、筆者の滞留期間は兩期五日間程度の短期であつたことからして、他の雲南・海南・客家・福州等の各小幫についてまで検討する余裕がなかつた。

マルキシズムに完全に徹することなく、共産党と対立する社会主義、また排外主義といつても、インドでは後退し、インド人によりもたらされた仏教が、カーストの鉄鎖を立ちきつて、多人種間の通婚により、共通意思をもたない複合社会の矛盾を緩和し、ネ・ウイン將軍は仏教を尊崇しなくとも、共通の寛容の仏教によって相互对立するよりも、国民形成、もしくは同化への途も開かれている。現地人と通婚して、開礦・工芸に従事する中国人も一八世紀代から少くなく、彼らはビルマ婦人と結婚するもの多く、土着化してビルマ人から親密に「胞<sup>ポ</sup>類<sup>ル</sup>」

(同胞)と呼称され親しまれて<sup>(6)</sup>いた。排外主義であっても、回教諸国の場合とは相違する仏教的寛容性の影響ともみられる。

以下、ネ・ウイン軍政下に残存するラングーンにおける華僑社会の二大帮の「慶福宮福建公司」と「観音古廟広東公司」について、その生成と特殊的構造について観察し、華僑社会の強韌性保持の特性を実証していきたい。

## 二 慶福宮「福建公司」の成立

ビルマと中国とは地理的にも相接し、歴史的にも、早くから陸路を通じての交通往来があり、また著名なものには明代鄭和の遠征のごとき海路を通じての接触もあり、明代中国からの塩輸出と、ビルマからの棉花輸入の隊商による「塩棉貿易」があり、清の乾隆時代には華僑によるワ州<sup>(7)</sup> Wa State の銀鋌開発もみられた。海路からは十八世紀末から十九世紀初頭に福建・広東人がタイ国・マレーシアをへて帆船貿易で、モールメン・ラングーン方面への進出をみていた。

ラングーン市区の建設の開始されたのは、第二次英緬戦争(一八五二年)以後のことであった。政府の人口統計によれば、一八七二年度のラングーンの華僑人口は三、一八一人で、全市人口の三・四%を占めていた。<sup>(7)</sup> 福建人の多くは福建省南部の廈門周辺の漳州・泉州人の福建帮であった。

**慶福宮福建公司の創建** 第二次英緬戦争後福建帮の進出とともに、その耆老邱冠英・揚仕誌、・陳祖吉・蘇永昌等が政府に申請して海浜街<sup>(8)</sup> Merchant Street と十八条街のラングーン河に面する区画を一八五九年獲得し、

ラングーンにおける華僑社会構造

廈門・シンガポール・マラッカ・ペナン・ジャカルタ・モールメント、現地の福建人達の援助をうけて、一八六一年着工、一八六四年初に「慶福宮」の落成をみた。慶は慶喜、福は福建省を意味し、同帮衆の集会評議糾紛調解の場所とした。

六大姓「慶福宮」は、血縁・地縁の結合からなる同姓村落の次の六大姓によって組織されていた。

- (1) 邱氏竜山堂
  - (2) 楊氏使頭公司（後に霞陽社楊氏植德堂と改称）
  - (3) 林氏九竜堂
  - (4) 李氏隴西堂
  - (5) 陳氏穎川堂
  - (6) 蘇氏蘆山堂
- 福建公司の経営は各姓氏公司の輪番協理によっていた。慶福宮は神仏を奉祀する廟宇であり、また前述のごとく福建系（泉漳系）の集会評議し、糾紛を調解する場所であった。<sup>(7)</sup> 六大姓氏公司は現在の福建省の廈門<sup>あおもん</sup> = Amoy 周辺の同姓村落団体であった。それはあたかもペナンにおける福建省海澄県、現在の廈門方面同姓村落出身の次の通りの五大姓が「福建公司」を輪番制で運営していたものをモデルとしたものとも観察されうる。
- (1) 新江社竜山堂邱氏公司 = Khoo Si Kongsi
  - (2) 霞陽社植德堂楊氏公司 = Yeoh Si Kongsi
  - (3) 鰲冠社世徳堂謝氏公司 = Cheah Si Kongsi

(4) 林東社九龍堂林氏公司 = Lim Si Kongsì

(5) 穎川堂陳氏公司 = Tan Si Kongsì

右のペナンの五大姓（邱・楊・謝・林・陳）は、何れも福建省海澄県（現在名、廈門県）出身の姓氏団体 = Jee Seh Societies であつた。各公司とも、数百——数千からの同族がペナンの一小島に集居している。右のうち、邱・楊・謝の三公司は近接した同姓村落の出身者団体であつて、その団結力は固く、自ら「三大魁堂」とさえ誇稱している。それらは Village Communities であつた。他の林姓と陳姓の団体は、同姓村落出身者のみに限定されないで、開放性のみられる点で、邱・楊・謝の「三大魁」とは若干相違をみている。

何れにしても、ラングーンの六大姓はペナンの五大姓と比較して、「邱」・「楊」・「林」・「陳」の四姓まで共通し、華僑社会の構造としてきわめて相似的なものがみられる。

郷里をもとにするのみならず、地理的にもペナンとラングーンでは近接し、相互に緊密な社会的、経済的、と きとしては政治的な連絡援助関係を保持していることは否定しえない。

一九六二年のネ・ウイン將軍独裁政権下の社会主義体制下に、なおラングーンに残留する八万人見当の華僑は、小販か賃銀労働者の地位におとされ、スラム的生活を余儀なくされる恵まれない環境下にあつて、海浜街 = Merchant Street の本国からの帆船の停泊する「華人碼頭」= China Wharf の前面に、朱塗の輪奐の美をはこる華麗な「慶福宮」（福建公司）を幾度かの戦災・掠奪にあいながらよく再建しえたのは、自力以外にペナンその他各方面の血縁・地縁的に緊密な関係にある「福建公司」（五大姓）・福建会馆等からの援助に負うところも少くなかつたことは容易に推測されうる。ここで、慶福宮の原型ともいふべきペナンの「五大姓」について簡単にふ

れておこう。

ペナンの五大姓は、前世紀から各数千名の同族が一小島内に集居し、五公司是連合して福建公司（大伯公）を組織し、同島内の多数の社寺（著名な蛇寺もその一つ）の維持経営を輪番制により協同担当していた。各公司とも寺廟に類する華麗な祠堂を建て、集議所を設け、同姓からの多額の信託金を保有し、その利息金をもつて、同姓のための学校・公塚（墓地）・農園その他共同救済事業を經營し、老年者（六〇才以上）に対する年金制度をも設けていた。

なお、今日では一九六九年に公布された借款法令によって、族親からの各堂への存款（預金）は停止され、存款部の結束を余儀なくされている。<sup>(8)</sup> 中国の華僑研究者「陳達」は右について、清朝の嘉慶年間（一七九六—一八二〇）ごろから族人のペナンに移住するもの増加し、民国一〇年（一九二一）には、公款は一〇〇万海峽ドル以上を算したことを述べ、公款の一部の利息をもつて光緒三二年（一九〇五）郷里にも清末科挙の制の廃止をみるとともに小学校を新設したことを明らかにしている。<sup>(9)</sup> 一八世紀後半ペナンにおける猪仔（苦力）貿易は邱氏文山堂に属する客頭＝Coolie Brokerとしての邱天徳＝Khoo Tan Teck 一人の掌中に独占されていた。<sup>(10)</sup> 筆者の見解では華僑資本形成の初期形態は、秘密結社の集団（公司＝Kongsi）を利用して苦力の血汗収奪の上に成立した「公司資本形態」とみなすべきものであると信ずる。

邱天徳（大伯公公司＝福建公司・総理）は、スマトラ・アサハンのタバコ農園への故郷廈門方面からの猪仔貿易を独占して、巨大な資本蓄積に成功していた。<sup>(11)</sup> 邱氏一族は今日でもペナンにおける土地家屋等の最大の不動産所有者でもある。

なお、参考のため龍山堂邱氏れいせんとうきゅうし公司の發展は筆者の調査したところでは、現在では次の通りの九衍派・四大組に分岐している。

「第一組」 岑派金山堂・田派丕振堂・松派紹德堂

「第二組」 梧派緝德堂・宅派潤德堂・井派耀德堂

「第三組」 海境派文山堂

「第四組」 門派垂德堂・嶼派垂統堂

多くの漢民族が誇示するその始祖「軒轅黃帝」から幾十百世代をへて、福建省南部に流亡してきた温陵開基邱氏延世公から分派して、如上のような四組・九派の分岐發展をみて今日におよんでいる。今日でも右の「邱氏公しゅうしこう」は、ペナンのみならず、ラングーンでも諸大姓のうちで筆頭の地位を占めている。

なお、「ペナン新江邱氏公司各派系親族人口統計表」(一九六九年九月三十日現在)を参考のためあげれば次表の通りである。<sup>(13)</sup>

これらの五大姓氏公司の目的とするところは、ラングーンの霞陽社使頭公司植德堂の例にとれば、その宗旨は次の通りである。<sup>(13)</sup>

(甲) 徳郷公派下の諸族人の教育費を資助し、本族人の中国霞陽社(村落名)とラングーンに居住するものに対し、仁義上の賛助をあたえ、その地位を高めること。

(乙) 使頭公(世祖徳卿公を指す)と列位を尊祀し、孝思を永くすること。

(丙) 本族人の福利を高め、保衛すること。

ラングーンにおける華僑社会構造

新江邱氏各派系親族登記統計表  
 登記日期由一九五九年元年起至一九六九年九月三十日止

派別	男性	女性	総共
四世祖進宗公(田房)	一五四	一四六	三〇〇
四世祖玄宗公(岑房)	一五二	一一一	二七三
五世祖広良公(宅房)	五八	五三	一一一
六世祖拱乾公(海長)	三八五	四一七	八〇二
六世祖拱辰公(海式)	六五二	六五六	一三〇八
六世祖拱弘公(海三)	一一	九	二〇
六世祖拱峻公(海四)	三七	二九	六六
六世祖拱宇公(海五)	二二三	二二六	四五九
六世祖惠乾公(松房)	三四七	三三〇	六七七
七世祖文客公(井房)	三八	三八	七六
七世祖文富公(梧房)	四五三	四七〇	九二三
八世祖世敏公(門房)	二〇三	一九六	三九九
八世祖世嚙公(嶼房)	二三八	二四二	四八〇
総計	二九六一	二九三二	五八九四

ラングーンにおける華僑社会構造

本表作者——新江詒穀堂廿一世裔孫邱福寿

(丁) ラングーンに居留する本族人の親植をあつくすること。

本国出身の村落の同族とも関連をもつて姓氏団体としての地位を高めることにある。本国では今日「厦門人民公社」の成立をみて、これらの同姓村落の本拠はなくなったが、なお海外において相互の連絡扶助をはかる傾向は後退をみていない。

**慶福宮成立の経過** Ⅱラングーンの福建公司としての慶福宮の六姓連合発起に際して、首任総理邱台根、討地人邱冠英であり、創設董事二九名の内訳は、商店九家、邱姓六名、陳姓三名、蘇姓三名、揚姓二名、曾・李・林・温各一名であつて、邱台根の信頼威望は高かつた。彼の子邱瑞軒は一八七五年先に建設されていた「正順宮」を改めて「竜山堂公司」を建設した。邱瑞軒は六姓を代表して宗族相互救済事業につと

め、竜山小学・華僑中学の設立をもしていた。<sup>(14)</sup>

なお、慶福宮の名称は「吉慶福祿」の義によるものであるが、前述のごとく会員に福建省泉州・漳州出身者の多いことからして、省名の「福」字をとり入れたものとされている。<sup>(15)</sup>

祭神は他の多くの華僑寺廟と同様の現世的混成宗教（道・儒・仏）<sup>シンクレチズム</sup>の三教合流の偶像崇拜であって、正座には「観音仏祖」と「天后聖母」（九尺玄女）、左には「山西夫子」（閩帝を中心とし、左右に閩平・周倉像）、右には保生大帝（保健大帝）と協天大帝（呂洞賓）を祭祀している。

天后は天后志によれば、生前父兄が海難と暴風に遇ったとき、勇をふるって父を救い、海に入って兄の屍をさがしだし、その孝行は各方面に伝えられ、二〇才で没して後民間に祠廟が立てられた。いわば、海上商人としての福建人の航海安全の保護神となっている。閩帝は三国志の英雄の閩羽であって、あらゆる危難に際しての生死同心の兄弟的仲間関係を象徴する商業神である。観音仏祖には子孫の長久繁栄と、保生大帝には長寿を祈念する。何れも現生的福祉の象徴神仏の混成からなっている。

六大姓は同姓村落であって、邱氏は「新江社」、陳氏は「鑿井社」、蕭氏は「深青社」、楊氏は「霞陽社」、林氏は「林東社」のごとく、海澄県の相互に隣接するか、河流で相対するか、近接の血縁的・地縁的に緊密な結合関係をもち自然村落であって、出先居住国においても、同様の村落社会を形成し、連合して慶福宮を建設し、「福建公司」を組織した。現在ではこの本国の郷里方面は「廈門人民公社」と称する一大行政区画に統合されてしまっているようであるが、現地ではなお自然的村落団体組織を保守している。したがって、福建省人なれば何人でも参加できる「旅緬福建同郷会」のごときは、相違する別個の封鎖的団体でもある。

ラングーンにおける華僑社会構造

慶福宮は一八九七年再建され、郷里における海澄県霞陽社大使爺宮の形式を採用した。その建築材料の輸送にはシンガポールの林秉祥（福建省人）や、林振宗の経営する「和豊船務公司」の汽船による義務奉仕に負うところが大きであった。<sup>(16)</sup>戦後の修葺は一九五三年に行われ、一九五九年慶福宮の修建落成大典が行われた。

同宮の財政は、今日では、(1)香燭販売費、(2)油香縁金、(3)寄附金、(4)家賃、(5)墓地と修路基金等である。支出は宮廟の修理増補・仏誕・上元節・清明節・中元節等の諸経費・墓地・道路の補修・通信費・給料・雑費等のほか、「閩僑療養所」、「西医義務免診所」の開設費、福山寺花園の費用等である。<sup>(17)</sup>

なお、慶福宮信託部と福建公司是六姓氏団体の「耆老」達によって輪番運営されていたが、華人社会の発展と事務の複雑化にともない、六姓のみによる「福建公司信託部」の名称を改めて一九三五年「慶福宮信託部」とし、その組織を拡大して、新たに六姓氏団体の代表を参加せしめ、一二姓氏団体の月別輪番制とした。

- (1) 四美堂代表 莊德薰
- (2) 清河堂代表 張文泰
- (3) 敦親堂代表 高如福
- (4) 隴西堂代表 李文珍
- (5) 穎川堂代表 陳春椽
- (6) 安定堂代表 胡支信
- (7) 汾陽堂代表 郭維良
- (8) 龍山堂代表 邱怡厥
- (9) 濟陽堂代表 蔡銀足
- (10) 植德堂代表 楊升茂
- (11) 九龍堂代表 林承妙
- (12) 蘆山堂代表 蘓真鐘

さらに、一九三八年には次の八姓氏団体の代表を追加した。

- (1) 太原堂 王文福
- (2) 江夏堂 黃清貴

- |            |               |
|------------|---------------|
| (3) 高陽堂許敬福 | (4) 榮陽堂鄭仕詮    |
| (5) 燉煌堂洪金銘 | (6) 延陵堂吳祥表    |
| (7) 南陽堂葉雪樵 | (8) 汝南堂代表(未定) |

一九五八年八月には、以上の二〇姓氏団体代表を四組に分って、毎組五人とし、そのうち一人を小組主席として当年事務を処理することとなった。当面の事業は福山寺の建設、療養所、西医門診所の充実、墓地の拡大等であつた。<sup>(18)</sup>

右は、シンガポール・マラッカ・ペナン・ラングーン等の貿易港諸都市に進出している福建省南部の廈門周辺の泉漳系統の集団が、同姓村落形態における団結性が予想外に固く、ペナンの五大姓と相似した六大姓を形成し、排外熱のつよい社会主義体制下のラングーンにあって、いくたびかの排華暴動にもあいなながらも、慶福宮(福建公司)の輪奐の美を依然として誇っている点に、そのユニークな団結精神を認められなければならない。

#### 四 観音古廟「広東公司」の成立

姓氏団体、もしくは村落団体を基盤として形成されている福建省南部廈門周辺の「泉漳集団」の「福建公司」について明らかにしたが、それとは土語・慣習において大いに相違するのみならず、その集団社会構造においても、若干相違のみられる「広東集団」の場合について、相互比較観察しておきたい。

広東省の首都「広州」は、近世初期から、ポルトガル以下のヨーロッパ諸国との交渉があり、鎖国はされてはいたが、広東人の海外に進出するものが少くなかった。ことに、一八五二年イギリス東インド会社が第二次英緬戦

ラングーンにおける華僑社会構造

争の結果、ラングーン占領以降広東系労働者が港湾・都市建設のため同地へ進出するものが少くなかった。すでに、一八五三年（咸豊三年）には、広東大街=Dalhousie Street 現在名=Maha Bandola Street や、中国廟宇の建設をみていた。広東人移民の集団移住は中国人社会に普遍的なように家族を基礎とし、郷村、もしくは大都市出身者の「姓氏団体」や「同郷団体」が林立形成されてきた。それとともに、広東人社会に盛んな賭博・競技場・阿片煙館・酒店なども開設され、他方、宗教祭祀の場所・書塾・校舎・墓地等の相互集会の場所が必要となり、観世音信仰の普及していたことからして、広東帮の耆老達は、一八五四年ダルハウジー街に「広東観音古廟」を設立し、そこに公的集団機関としての「広東公司」をおいた。その業務を管理したのは、「福建公司」の場合のごとく、六大姓代表のごとき同姓村落の姓氏団体でなくはなく、「耆老会」であった。<sup>(19)</sup>

「耆老」は伝統に依存する中国民間社会の封鎖的協同体的生活の指導統率者ともいべきものであって、ラングーンにおける広東人社会の筆頭の一人としては「林萬徳」（広東省台山県横江郷人）があげられる。彼の観音信仰は深く「広東観音古廟」は整備されていた。「耆老会」は各姓氏団体、その他広東公司の事業上関係ある社団から代表一名が選出されて組織され、全員六六名で構成されていた。政府との交渉連絡のためにも、もっとも能力あるものが、会長となり、公司の財政に関しても臨時会議を開催して運営をはかることになっていた。それは広東公司の「保管人の集合体」でもあって、ビルマ政府に対して法律上、道義上の責任を果し、できうる限り、政治的闘争を回避して、自治的な宗教的・慈善的・社会的活動に重点をおくこととしていた。

宗教慈善活動としては、(1)観音誕節の祭祀、(2)疫病流行時の苦難免脱の祈祷、(3)中元節の祭祀、(4)孤苦・死亡者の救済事業、(5)清明節の掃墓、(6)公私各機関から寄附金による中国・ビルマ両族間の水災・火災・兵火・その

他の災難に際しての救済事業等であった。

「広東公司」に附属する社団としては、「利城行」・「魯城行」・「北城行」・「魯北行」等の「行」（21） 廣東音 Hang, 北京音 Hang（店・組合・街路・保証仲立人・問屋等を意味する）が多数を占めていることが、福建公司の「姓氏団体」（公司）が基礎を形成していることは対照的である。

広東人達が職人的で、同業組合・職人組合としての「行」を組織するものが、少くないことによるものといえる。彼らの郷里の首都「廣州」省城には、有名な「西共堂七十二行」（その後の廣州市商會）があり、その省城西関外には、清代外国貿易を専管した官許の「廣州十三行」（別名、公行（21） Co-Hong）があった。また、戦前中国最大の国内商業都市の「漢口」には「三百六十行」、香港には「五十五行」が存在し、マレーシアの首都の廣東華僑支配のクアランプールには、現在「三十二行団總商會」がある等、広東人社会の基盤として、前期的問屋商人形態ともいべき「行」が大きな役割を果たしている。

中国では、古代から商人社会の発達をみ、「行」の前身も、周礼の司市・質人の制にまで遡りえられ、漢代煮塩の利によって大富を収めた斉（山東）の「東郭咸陽」や、鑄鉄工で富裕となった「孔僅」、貨物の交易で巨万の富をえた「陶朱」、塩業によって産をなした「猗頓」等、司馬遷の史記「貨殖列伝」のうちにはその名が多く列ねられている。唐宋代には「行」の発達をみ、明清代には政府の法規として牙行制度の完成をみ、民間社会には慣習規約としての「行」の慣行の普及するところとなっていた。（22）

先に、華僑資本の先駆形態として苦力ブローカーの「公司資本形態」をあげたが、さらに伝統的に本国・海外を通じて発展していた前期的な「行（問屋）資本形態」も早くから有力な存在を示していたことはみすごされて

はならぬ。

問屋資本は福建幫では「行」=Hong といわぬで、「郊」=Kao と呼称している。本国の厦門の十途郊（洋郊  
 Ⅱ外国貿易商、北郊Ⅱ華北貿易商、疋頭郊Ⅱ綢緞・綿織物商、菓郊・泉郊Ⅱ泉州方面との貿易商、紙郊・茶郊・碗郊Ⅱ陶磁器  
 類輸出商・広東郊・綿紗郊）は著名であったし、そのほか仰光郊（ラングーン貿易商）、爪哇郊（インドネシア貿易商）、  
 安南郊、米郊・油郊等がある。その大半は貿易商である。何故、「福建幫」（土語・習俗とも福建幫に近似する潮州幫  
 をもふくむ）が一般に「行」と称するものをとくに「郊」と称したのであるうか。

筆者の見解では、福建幫では同姓村落（社）が出先居住国でも、楊氏は霞陽社、蘇氏は深青社、邱氏は新江社、  
 林氏は林東社、陳氏は鑾井社のごとく、各姓氏団体が「社」名をとなえて林立している。「社」は后土、すなわ  
 ち「土地」の神であり、万物を生ぜしめる神として、尊崇され、冬至に「天」を祭るのを「郊」といい、夏至に  
 天に配する地を祭るのを「社」という、中国の古代思想のシンメトリカルな天地陰陽の二元主義の影響をうけ  
 て、多くの林立する同姓村落の「社」に対して、貿易商、物産業者等の同業組合、ないしは問屋商人を「郊」と  
 よんで「郊社之礼」の中国固有の伝統的三元主義を対比象徴せしめた福建幫の慣行と解すべきであろう。  
 華僑社会は、集団主義社会であるが、その場合にも、広東幫と福建幫と比較する場合に、そのタイプに右のご  
 とく若干の相違がみられる。

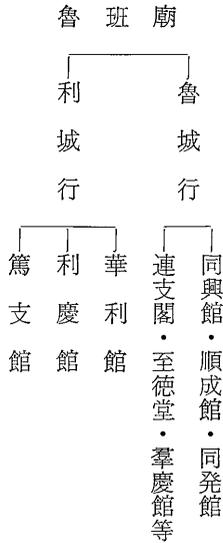
「広東公司」を管理運営にあたる「耆老会」のメンバーについてみると、「林萬徳」（台山県出身）は建築  
 技師で「利城行」に属し、「鄧其清」（台山県出身）は土木建築商で「魯城行」と「北城行」の董事を兼ねている。

「李崇広」（台山県出身）は酒業・当業・木業に従事し、「魯城行」の職員でもある。「丘嶺梅」（蕉嶺県出身）は酒

業を経営し、「利城行」の正理事長である。「余福源」（台山県出身）は鉄工業に従事し「敬德行」の副理事長である。「葉柏源」（新会県出身）は「利城行」の副理事長である等が、その主なるものとしてあげられる。耆老の多くは、何らかの「行」に所属する。<sup>(22)</sup>

さらに、広東公司に特徴的なことは、秘密結社員であるものが少くない。秘密結社の「洪門洪順総堂」≡Hung Men Society の下位に所属する団体には、「和義館」、「勝興館」、「英傑館」、「光中社」、「光義社」、「紅鷹社」等がある。それらは広東幫を主体とするサンフランシスコの唐人街の堂会≡Tongs とも共通相似するものがある。広東幫の姓氏団体としては、陳・李・黄の三姓団体が目立っている。

さらに、洪門団体・広東公司のほかに、「魯班廟」があり、その下位団体は尖塔状的に次のように構成されている。<sup>(23)</sup>



同郷団体としては、サンフランシスコの場合と同様、台山県出身者がもっとも多く、「仰光寧陽会館」（一八六四年設立）があり、その他「岡州会館」（一八八五年設立）、「仰光五邑会館」（南海・番禺・順徳・東莞・中山の五県、一八六四年設立）、「仰光中山館」（中山県出身者団体、民国前三五―六年間設立）等がある。<sup>(25)</sup>

ラングーンにおける華僑社会構造

ラングーンにおける華僑社会構造

広東帮をマジョリティとして構成されているサンフランシスコのほかアメリカ大陸各主要都市における唐人街社会に秘密結社の堂会の普及していることと共通する特性がみいださる。<sup>(24)</sup> 海外の広東人社会が福建帮の「商人型」に対して、労働者、ないしは職人的要素が比較的につよい結果といえよう。

「広東公司」の祭神は、中央に「觀世音菩薩蓮殿」があり、左右に「北帝爺殿」と「華光大帝殿」があり、儒教三教の混成宗教であることは、他の諸帮の場合とも共通している。

公司の経営する墓地としては、旧墳場は一八五九年にイギリス政府からカルバート路=Culvert Road に八エーカー余の土地の分譲をうけ、その後一九一七年に新墓場として吉加山路=Kyalkasan に六・一一エーカーの譲渡をうけ、大伯公墳墓の完成をみた。

学校としては、戦前には広東系に「育徳」、「培元」の両校、福建系には「平民学校」があり、福建系には「女子公学」、広東系には「育徳女校」があったが、戦後の状況については、何らの記録がないので明らかにしがたい。

なお、ラングーン広東公司の下部所属の社団名をあげれば、次の通りのものがある。<sup>(26)</sup>

- (1) 仰光岡州会館 (会員数三〇〇余名)
- (2) 仰光徳星別墅 (陳姓団体)
- (3) 仰光陳家館
- (4) 仰光五邑会館 (南海・番禺・順徳・東莞・中山の五県、全員数四五九名)
- (5) 仰光協英館 (何姓団体)
- (6) 仰光江夏堂黃家館 (黃姓団体)

- (7) 仰光馮氏始平館（馮姓団体、会員数一〇三名）
- (8) 仰光伍氏家塾（伍姓団体、会員数五八八名）
- (9) 仰光梁家館（梁姓団体、会員数四〇〇余名）
- (10) 仰光同発館
- (11) 仰光譚家館（譚姓団体、会員数二〇〇余名）
- (12) 仰光鄧氏高密館（鄧姓団体、会員数一〇六名）
- (13) 仰光勝興館
- (14) 仰光雷方廊迦源堂（雷・方・廊姓団体）
- (15) 仰光中山館（中山県同郷団体、会員数二〇〇余名）
- (16) 仰光魯城行（会員数一、四〇〇余名）
- (17) 仰光李家館（李姓団体、会員数一、二三九名）
- (18) 仰光連枝館
- (19) 仰光広華館（陳姓団体、会員数六〇余名）
- (20) 仰光和義館
- (21) 仰光酒樓茶室職工公会（会員数二五〇余名）
- (22) 仰光利城行（会員数、約一、〇〇〇名）
- (23) 仰光華利館（会員数九〇余名）

ラングーンにおける華僑社会構造



(24) 仰光曹氏家族会(会員数、六八七名)

(25) 仰光英傑館

右の諸団体は前頁図にも明らかにされるごとくきびれてはいるが、なお現存している。

右の社団のうち姓氏団体とみられるものもつとも多く、一―三団体がある。同郷団体とみるべきものは三団体ほどであり、明らかに経済的団体とみられるものも、三団体程度にすぎない。ネ・ウィン政権下で経済的後退をみている結果といえよう。

戦後、ビルマの徹底した外国資本排除主義と社会主義体制下において、残存してきたものは商業サービス部門では、小規模化した酒樓茶室・糖果・ビスケット・理髪・自動車修理・生果・鉄工・産院等であり、大規模な繊維・雜貨商・貿易・銀行等はすべて政府に接収されてしまっている。

工業面では、ビスケット・制帽・糖果以外の諸工業は全部消滅をみている。<sup>(27)</sup>

戦前は、「広東人達」は上部ビルマの玉石・ルビー等の宝石の採掘彫琢、さらに木材業・酒業等に進出し、「福建人達」はタイ・マレーシア・香港・本国間の貿易、「潮州人」は米業、客家は当業・針織業等に進出し、インド人とならんで、ビルマ経済で大きな役割を果してきたが、今日のネ・ウィン政権下では貿易・銀行のほか大規模企業以上は全滅しさり、漸くマーケット内か、街路の小販、小規模の食堂・理髪・雜貨・糖貨等のサービス販売業が残存しているにすぎない。消費の末端にいたるまでの配給制度による徹底した社会主義体制までにはいたらないで、半社会主義的要素としての協同組合の段階にとどまっているように観察された。

なお、華僑商人社会の最上位団体の「中華総商会」は「華商商会」と改称して現在海辺街にあつて政府側に接

収された「中国銀行」の四階にあるが、毛沢東主席の写真を掲げている程度で、無人に近い存在となり、商会主席名も楊姓とのみ明らかにしえたにすぎない。

西に隣接する新興国バングラデシュにまでソ連勢力の進出をみ、中東部のケントン州の阿片栽培地帯、いわゆるゴールデン・トライアングルには戦争中からの国府部隊が残存し、中部辺まで漸次中国本土側勢力の進出がみられ、ビルマの政治的にソ中勢力には生まれた存在にはきわめてきびしいものがある。ネ・ウィン軍政の全面的排外主義、ないしは貝殻のふたをしめたような孤立化は、このようなきびしい環境から余儀なくされてきたものとも理解されうる。

このような緊迫化した情勢下にあっても、華僑社会とその経済は、東南アジア諸国にもつ固有の集団的ネットワークと、歴史的に上層政治権力にも容易に屈服しない鍛え抜かれてきた自力救済体制と、固有の自由放恣ともいうべき経済発展方式をもって力づよく生き抜いていくものと予想されうる。

(1) 華僑人口に関するまとまった統計表が本表が最新のものであるが、一九六六年以降華僑人口の異動の明らかにされる諸国もあるが、大半は推計であることはいうまでもない。

日本は四九、三四八人となっているが、一九七三年十一月末現在で四五、六二八人に減少をみている。台湾との国交断絶による帰化申請者のふえたことによるとみられている。マレーシア(西マレーシア・サバ・サラワク)の分は三、七二七、六四四人であるが、一九七〇年度国勢調査では、三、五五五、八七九人にこれも減少している。シンガポールは、一、四一三、二〇〇人から一、六三四、六〇〇人(一九七二年度推計 Monthly Digest of Statistics, Vol. XII, No. 7, July, 1973, p. 3.)に<sup>24</sup>え、七六・一%の人口比(総人口数二、一四七、四〇〇人)

を占めている。インドネシアの二、五五〇、〇〇〇人については三〇〇万説・四〇〇万説あり、明確にしがたい。タイについても、あくまでも推計であり、フィリピンの二二〇、〇二九人に対しても、一〇〇万説・一五〇万説等があり、華僑人口については、別稿で検討することとする。

- (2) シンガポール政庁、統計局の許国清「Lawrence Khor の報告書 “Annual Budget Statement” p. 1. 5」、「最近のシンガポール経済事情（一九七三年五月）」、在シンガポール日本国大使館編集、シンガポール日本商工会議所発行、一、一般概況、第一頁。
- (3) 「華僑経済年鑑」、華僑経済年鑑編輯委員会、中華民國六十九年十月刊行、第九六—九七頁。
- (4) 前掲中華民國五十一年「華僑経済年鑑」、第九八—九九頁。
- (5) Burma Gazetteer, “Pegu District” Vol. A, compiled by Mr. A. J. Page, I. C. S. Settlement officer Rangoon, 1917, “Reprint - 1963” pp. 16—17.
- (6) 「南洋文摘」、第五卷、第二期（統第五十期）一九六四年二月一日発行所載、陳孺生「緬甸華僑史畧」、第二二頁。
- (7) 「慶福官百年慶典特刊」一九六一年十二月廿五日集美印務公司承印、所載「慶福官百年來沿革簡史」第四頁。
- (8) 「新江梧房裕德堂文富公派系譜牒」、浜城繩德堂邱公司編印、最末尾参照。
- (9) 陳達著「南洋華僑与閩粵華僑社会」、商務印書館、中華民國二十七年刊行、第二一四頁。
- (10) Persia Crawford Campbell, Chinese Coole Emigration, London 1923, p. 6.
- (11) 同右、p. 8.
- (12) 「新江梧房裕德堂文富公派系譜牒」、所載「浜城龍山堂邱公司史畧暨堂務發展概況」、第五葉目。
- (13) Rules and Regulations of Sit Teik Tong Society Ha Yong (Sze Thow Kongs), Rangoon.) Rangoon 1935, pp. 1—2.

ラングーンにおける華僑社会構造

ラングーンにおける華僑社会構造

- (14) 前掲「慶福宮百週年紀念特刊」所載「慶福宮与龍山堂一些概況」第一四—一六頁。
- (15) 前掲書、第五頁。
- (16) 前掲書、第六頁。
- (17) 前掲書、第九頁。
- (18) 前掲書、第五—一三頁。
- (19) 「仰光廣東古觀音古廟重修落成紀念特刊」一九五六年十二月十二日刊行、所載「仰光觀音古廟(又名広東廟或広公司)史畧」をみよ。なお、本稿には頁数は記載されていない。
- (20) 「耆老」については、根岸信博士著「中国社会に於ける指導層——耆老紳士の研究」、昭和二十二年九月、平和書房刊に詳説されている。
- (21) 辛亥革命前夜の「西共堂七十二行」の粵漢鐵路建設問題をめぐる経過については、内田直作著「東洋經濟史研究」(I)、昭和四十五年、千倉書房刊行、第七章参照。
- (22) 内田直作論文「中国における商業秩序の基礎」一橋論叢、第二二卷、第二号所載、第四九—七三頁。
- (23) 緬甸仰光賓陽會館九十週年紀念特刊、中華民國四十三年十一月八日刊行、第二二—二一頁。
- (24) 「仰光広東觀音古廟重修落成紀念特刊」一九五六年刊行、所載「仰光広東公司現任耆老芳名録」第二二—四〇頁。
- (25) 内田直作研究ノート「三藩市唐人街の社会構造——広肇帮の一典型」(四)、成城大学「經濟研究」第二十四号所載、「堂会」の条。
- (26) 前掲書「仰光広東觀音古廟重修落成紀念特刊」、所載「仰光広東公司所属社団及緬属各広東會館概況表」、第一八七—二二二頁。
- (27) 「華僑經濟年鑑」華僑經濟年鑑編輯委員會、中華民國五十八年刊行、第二篇「緬甸」第九八—九頁。